

教育学研究科・グローバル教育展開オフィス

丹治 真琴・教育認知心理学コース・修士課程2年

国際学会：24th conference of the European Society for Cognitive Psychology

参加地・期間：Sheffield, United Kingdom・2025年9月2日～9月5日

発表題目：Item-Specific Processing for Real-World Objects in Visual Working Memory: Effects of Presentation Time

成果の概要

今回のESCoPは、私にとって初めての国際学会参加であり、初めてのポスター発表の機会でもありました。

メインカンファレンスは3日間にわたり開催され、注意、知覚、記憶、学習、メタ認知、言語など、認知心理学の多様なテーマに関するシンポジウムや発表が行われました。特に、私の研究対象であるワーキングメモリに関連するシンポジウムが多数あり、これまで知らなかった研究や論文に関する情報を新たに得ることができました。今後、それらの論文を精読することで、自身の研究に新たな示唆を得られるのではないかと考えています。また、過去に何度も読んだことのある論文の著者の話を直接聞く機会も多くありました。その中で、各研究者がどのような考えのもとで研究を進めているのか、また活躍している研究者がどのような点に関心を持っているのかを知ることができました。

自身のポスター発表では、現実物体を対象とする視覚性ワーキングメモリの再認成績に対する記憶方略の有効性に、視覚刺激の呈示時間が及ぼす影響を検討した実験について発表しました。初めてのポスター発表で緊張していましたが、参加者の方々が理解しようと親身に耳を傾けてくれたため、落ち着いて発表することができました。今回の発表を通して、実施してよかった点と今後の課題点が明確になりました。

まず、実施してよかったと感じた点は、想定質問への回答と補足資料の準備です。学内の発表で受けた質問や提案に対して、自分の考えを英語で伝える表現方法をあらかじめ考えておくことです。それに加えて、その根拠となる追加分析の結果や先行研究、過去の発表資料もすぐに提示できるよう準備しました。実際、想定していた考察内容に関する質問に対し、追加の分析結果を示すことで、納得してもらうことができました。このような事前準備が、研究内容を理解してもらう助けになったと感じています。

一方で、もっと的確に説明できていれば、さらに踏み込んだ議論ができたのではないかと感じた場面もありました。伝えたい内容はあるものの、それを英語でうまく表現できないことがありました。質問には短く答えられても、その背景にあるこれまでの実験結果などについて、論理立てて適切な英語で説明することは難しく、今後の課題だと考えています。このような力は、発表内容の理解にとどまらず、派生する研究内容や次の計画について相手の考えを引き出すためにも重要なことだと感じました。

コーヒープレイクやカンファレンスディナーでは、参加者との交流の機会もありました。発表の場とは異なり、皆さん飲み物を片手にリラックスした雰囲気での交流を楽しんでいました。今回は、初の国際学会参加ということもあり、一緒に学会に参加していた先輩が様々な方を紹介してくれました。今後は、自分自身で関係を構築できるようにしていきたいと考えています。そのために、英語力に加え、プレゼンテーション力やコミュニケーション力を鍛えていきたいと思っています。

今回の国際学会参加を通して、自分の研究を他の研究者から広く興味を持ってもらえるものにしたという思いがより強くなりました。多くの論文に触れ、研究動向を把握し、意義のある研究成果が得られるよう精力的に研究活動を進めていきたいと考えています。研究に関する情報を集めることは論文を読むことで十分可能です。しかし、その研究の背後にある研究者の考えや熱意は、実際に研究者の話聞き、交流することでより理解できるものだと感じました。今回、本支援をいただいたことで、今後の研究活動にも大いに役立つ経験をすることができました。この場を借りて、深く御礼申し上げます。